



素晴らしきロン日の子どもたちのために

「ならぬことは、ならぬのです」 じゅう おきて 什の掟から

校長 佐藤 雅彦

江戸時代、現在の福島県西部地区は会津藩と呼ばれていました。幕末、衰退していく徳川家のために最後の最後まで忠義を尽くし戦った会津藩のことは、当藩隊士の子息で組織された白虎隊士の自決などの悲劇としても語り継がれています。当時の会津藩の子どもたちは、道徳として、「什の掟」という絶対的な行動規律を学びました。

- 一つ、年長者の言うことに背かない
- 一つ、嘘をつかない
- 一つ、卑怯なふるまいをしない
- 一つ、弱い者をいじめてはならない



などの内容で、その最後は「ならぬことは、ならぬ」という言葉で締めくくられています。

「ならぬことは、ならぬ」とは、この世の中で自分が巡り合う人たちと共に生きていくためには、絶対に行ってはいけないことがあり、それには言い訳や屁理屈は通らないのだという強い戒めの意味が込められているのです。

すでに150年以上も昔のことであり、現代の道徳律には当然そぐわないものもあります。しかしながら、卑怯なふるまいや虚言、相手や場に応じた礼儀知らず、いじめをすることなど、人として恥ずべき行為は不易なものだと考えるのです。さらに、会津の子どもたちは、その「掟」を強制的に約束させられて守っていたわけではないと伝えられています。本校の合言葉である『自立・貢献・気品』の精神と同様に、自ら主体的に学ぶ中でその重要性をつかみ、会得していったものだとして理解しています。

人は誰しも、物事を判断したり何らかの行動を起こしたりする際の判断基準を持っています。その基準は人によって少しずつ異なるものかもしれませんが、しかし、なによりも大切なことは、自分のその基準が周りにいる人たちを楽しく幸せな気持ちにするものなのか、さらには自分自身の人格を高めるものなのかということです。決して、周囲の人を悲

しませたり、苦しめたりしてはならないはずで、「ならぬことは、ならぬ」のです。

私たちロン日教職員は、今年度1学期始業式の際にも述べたように、「自分がして欲しいことを、周りの人にします。」「自分がされて嫌な気持ちになることは、絶対に他の人にしません。」の精神を、全校児童生徒へ繰り返し伝え、日々の指導支援を行っていきたくと考えています。

しかしながら、児童生徒の個性を尊重し、その伸長を図るためには、学校と家庭がそれぞれの教育機能を十分に発揮しその責任を果たすとともに、相互の連携のもとでこそ教育効果が高められるものだと考えます。なぜならば、家庭は児童生徒の人格を形成する教育環境として最大の影響力をもっているといっても過言ではないからです。子どもたちの成長の土台となる信頼感の形成には、自己を受容、共感し、温かく見守ってくれる大人が必要です。自分がかげがえのない家族の一員であり、愛されると実感することによって自己存在感を抱き、安心してのびのびと生活することができるのです。その上で、時には「ならぬことはならぬ」のだと教えることが必要な場面もあろうかと思えます。本校は、引き続き学校・学年・学級の通信やブログ等を通して、積極的な情報発信に努めてまいります。また、保護者会等による相互交流、ピックアップ時や電話等による日常的な連携も併せて図ってまいりますので、どうかよろしく願いいたします。

今月は、校外学習が計画されています。

- * 中2 修学旅行 (スコットランド)
- * 小6 修学旅行 (ウェールズ地方)
- * 小5 自然体験教室 * 他学年は遠足実施

自立
貢献
気品

[ロンドン日本人学校公式 Blog](#)

ロンドン日本人学校の“今”を伝える
公式 blog を御覧ください。

